

2022. 3. 13. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書9章14～29節
『いやしの只中で』

本日の聖書の箇所には「汚れた霊に取りつかれた子をいやす」という小標題が掲げられています。一体この「汚れた霊」とは何なのでしょう。てんかん発作にまつわる治療なのでしょう。それとも実際に霊の存在にまつわる迷信なのでしょうか……。

14節でマルコは「律法学者たちと議論していた」と物語の起こりを設定します。ここでは前回の2～8節で学びました「ユダヤ教の権威」にがんじがらめになって、もはや息継ぐことさえ出来ない人々の姿があらわにされてゆきます。

17節ではひとりの子どもの様子を借りて「この子は霊に取りつかれて、ものが言えません」と表現し、又、18節では「霊がこの子に取りつくと、所かまわず地面に引き倒すのです。すると、この子は口から泡を出し、歯ぎしりして体をこわばらせてしまいます」と細かな様子を付け加えます。

実はこれらは初代教会が向き合った当時のユダヤ教がもたらす弊害についての叙述なのです。初代教会といえどもその実態はユダヤ教をベースに成り立っています。というよりユダヤ教を完全に否定することは初代教会、つまり自分たちの足元を否定することにもなるのです。これが初代教会の持つジレンマでもあり、同時に存在意義でもあったのです。

簡単に言うと、当時は律法と預言に限りなく100%に近い「従い」が求められました。それも日常生活の微に入り細に入り全ての行いにチェックが入ったのです。そんな「完璧」を要請されても応えらる訳がありません。しかし、応えられない者は、一部の応えられる者と公認された人々(律法学者等)によって罪に定められるのです。救いはほんの一握りの人々が独占し、彼らの教憲・教規に従わない者は裁きだけが待っていました。

右傾化した国家が国民に愛国心を強要するように、彼らは「完璧な従い」を信仰と偽って要求したのです。そこでは疑問を持つことも許されず、人々は彼らの主張する美辞麗句に飾られた一つの信仰理解しか与えられなかったのです。

外にはローマの圧政、内には宗教の抑圧。本来、人を救うはずの律法と預言がねじまげられて、裁きと差別に特化していました。そこには「汚れた霊」につかれた者だけが悪いのであって、彼を裁く側は正義であり、問われもしないというのが律法学者等の信仰理解だったのです。つまり「いやされる側の信仰」だけが問われたのです。そのような社会について行けない人やまつろわぬ人は皆「汚れた霊」につかれた人としてしか生きざるを得ないのです。

19 節でイエスは「なんと信仰のない時代なのか」と嘆かれます。

しかし、20 節以下でイエスは「汚れた霊」につかれた子を、その父親共々といねいに向き合っただけでいやしてゆかれます。

ここで初めて治療や介護に当たった初代教会の「いやす側の信仰」が問われるのです。律法と預言という同じ基盤に生きる者として無視は出来ないのです。「汚れた霊」を生み出し続けるのは確かに律法学者等なのですが、初代教会はそれを自分たちの責任として受け入れ直したのです。ここにイエスの十字架の愛を現実化したのです。そして、この捉え直しの作業が初代教会の働き場であり、福音であり、祈り(29 節)なのです。